

## 【International PARK Official AlbumNotes】

ワンと鳴いてニャン創設期に GM としてチームを作り現在への基礎を固めた功労者、中村ロビンソン GM による 1st アルバム「International PARK」全曲解説です。

### 01. Can`t Control Myself Again

ONE MORE Purple の世界へようこそ。そう言えるくらいバンドの雰囲気にもマッチしている楽曲。ライブでのオープニング SE としても定着してきたのでレギュラー的な存在になっている。その次の楽曲に繋がる役目としてはオープニング以外にも起用できそうでまだまだこの楽曲の役目は多岐にわたっていきそうなのは非常に楽しみであり、演奏曲としての成長にも期待したい楽曲。

### 02. PLAY OF THE MUUSE PARK

Can`t Control Myself Again から流れるように場面は大舞台へと切り替わっていった。一気に戦場のよう荒れる寒さの渦が巻かれる荒野のような地に連れて行かれた感に襲われる。ONE MORE Purple が序盤から全力疾走で勝負をしてきている楽曲である。初代エースボーカルとして不動のポジションを担った男、「山下僚海」選手の音域を生かしたボーカルと、アクロバティックなサウンドで圧巻している。

### 03. イクサビト I

序盤からの流れとこの曲の繋がりからも、ここで描かれている PARK というのは、楽しい場所でもなく賑やかでメルヘンな場所でもないことがすぐにわかる。決意を胸に戦う場であり、勝負をする場である。緊張感抜群のインストナンバーであるが、よくぞここまで徹底的にこの世界観と緊張感を音楽だけで表現出来たものだと今でも感心している。

### 04. イクサビト II

そのままインストから爆音のロックチューンへと進み、「山下僚海」選手の英詞によるボーカルが際立つ新たなバンドの側面を見せつける楽曲に仕上がった。その後リリースされた作品を含めて最もエッジの効いたアグレッシブでハードな楽曲だと言えるであろう。メッセージも強烈で、聴いている全員に強く訴えていることが聴いていてもわかるはずだ。完全に序盤からハードな路線を突き進むように思わせた楽曲だが、このままでは終わらないのが今作品のテーマ通りなのかもしれない。

## 05. METRO WALK

ハード路線から一転して落ち着いた雰囲気であり、奇妙な雰囲気であり、アンダーグラウンドな世界観を見せてくれるこのバンドでは珍しいタイプの中ドラックである。明るくともどこかミステリアスな絶妙なサウンドが延々と流れ、無機質なシンセ音がちょっと不気味さを演出しているように思える。ライブでも変化球的な存在として欠かせることの出来ない重要なパーツを担う曲に成長し続けている。

## 06. ANOTHER FAITH

ボーカル「山下僚海」選手による前半セクションのシメとして、このリリース時点で最もバンドの代表曲、メイン楽曲として扱われていたこの曲をこの場所に。前身バンド時代から演奏されており、何度もリニューアルし続け完成形にこだわった楽曲だと聞いている。その言葉通り、リリース以降もバンドにとって大切な中心楽曲としての存在感は色あせていない。続編の「ユルセナイヤツ」に実は繋がっているような気がしているのは私の勝手な推測であるが、果たして。

## 07. MIRROR

ミステリアスすぎるインストだと最初は思ったが、徐々に展開していくストーリーだと気づいた。バイオリンの音色、シンセの音色、こんな雰囲気の楽曲も作れるバンドだと証明したが、後半、ますますミステリアスなエンディングに。「植木坂 Miracle」選手のボーカルを採用し、完全ここだけの独自の世界観作りに成功している。MIRROR それは異次元に繋がる特別なアイテム。

## 08. AXVXEXC

「植木坂 Miracle」選手のシャウトボーカルが全開。イクサビトⅡにも負けず劣らないハードナンバーとしてアルバムの中心部分にメスを入れる。タイトルの由来を知ったら誰もが笑ってしまう可能性が高いテーマなのにここまでアングリーなアクション全開な楽曲は後にも先にもこの曲だけなのでは？案外、ライブでは定番曲の一つになっていて、ライブ適正抜群で今後も演奏は続くのかもしれない。

## 09. Coloring Light People

次の曲から「山下僚海」選手によるセクションの後半スタートということで、そこに繋ぐためのメルヘンチックなバラードソングに、ライブでの実績も抜群な「京・KEI」選手をボーカルとして抜擢。これが抜群にハマっていて最高の美声と音楽の融合が心地よく、ついついうっとりしてしまう。前曲からの急カーブについていけない人多発なある意味危険なナンバー。このアルバムの幅広さに決定打を打った楽曲。アルバムタイトルの奥深い意味にもリンクしてるように思える。

## 10. Coloring Purple People

ここからの後半戦はまるでライブのような展開となっている。ライブの定番、バンドの代表曲であるこちらの曲。堂々と歌いきるボーカリスト「山下僚海」選手は、しっかりと前曲の「京・KEI-」選手からバトンを受け取りアルバムラストまで突っ走っている。この曲並びはライブをかなり意識されている作りであるがその勢いに火をつける意味でこの曲の存在感は抜きん出ている。個人的にはいつまでも、どんな時も ONE MORE Purple のライブでは光り輝きそれをオーディエンスと一体となって共有している。そんな姿をずっと見せ続けてほしい楽曲だと願っている。

## 11. Vladvostok ～着氷の湖～

続編の「Snowbell」に続く気配が彷徨う寒さを感じるクールな曲だ。バンドとしてここまでノスタルジックかつクールな楽曲を生み出したのは過去にない事だったはず。ライブでも本来は後半の位置に配置して演奏するイメージがあったというが、序盤に置いたらマッチしてしまいそのまま前半の中心楽曲になってしまったという話もあったが、どこに置いても唯一無二な存在感を放つ影の「アルバムリード曲」であると私は推測している。

## 12. Fountain ～Larghetto in G major～

完成後、曲順配置で後悔したのはこの曲だと聞いたがベストの場所は他に見つけてしまったからだそうであり、この時点ではここがベストポジションであったわけだ。終わりのようで終わらない。それが International PARK の世界である。現在リリース停止になっているのはこれが理由という噂も？

## 13. JELLY FISH&ZERO FLY

実は「京・KEI-」選手によるボーカルでレコーディングされ、アルバムのラストに配置されいたこの曲だが、「山下僚海」選手のバージョンと比較した結果、こちらが採用されたようだがこちらのバージョンだとアルバムのラストにはもうワンクッション必要という判断により 13 曲目となった。アルバムのリード曲であるこの曲が後半にいるのもライブを意識した点と、前半後半で世界観や雰囲気を一転させたい狙いがあったからだろう。

## 14. Night View Story

タイトルそのままな楽曲。前半の戦場での激しい戦いは一体何だったのか。それぐらいの別世界が用意されていた。しかしそこはただ素敵な景色を伝えているだけではない。この曲をラストに配置した意味を考えると本当に奥が深い。（意図は明かしてもらえていない）それまでスピードナンバーとバラードナンバーに 2 分類されていたこのバンドの曲のバリエーションを大きく増やすことになったこのアルバム。この曲もまさにその役割を果たしたと言えるだろう。